

病虫害の発生概況

〔病害発生概況〕

1. 稲・麦

早期水稻では宮崎県で葉いもち、穂いもちが、鹿児島県で穂いもちがやや多〜多発生した。宮崎県の葉いもち初発期は平年並みの5月12日であったが、発生面積率が高かったため5月14日に注意報を発表した。その後、発生面積、発生程度も平年より高く推移したため、6月11日に穂いもち注意報を発表した。4月下旬から高温、少照傾向が続き、6月下旬から7月上旬にかけて高温、多湿日が多かったことが多発生の原因になった。このような気象条件によって紋枯病も多発生した。

普通期水稻では葉いもちが福岡、佐賀、大分、宮崎および鹿児島県でやや多〜多発生になったが、長崎、熊本県ではやや少〜並み発生であった。7月中、下旬に降雨日が多くなり、穂いもちの多発生が懸念されたために福岡、熊本、大分、宮崎および鹿児島県の5県が注意報を発表したが、その後の天候の回復により宮崎、鹿児島県でやや多発生になった以外は並み発生で終った。

本年は例年になく台風が早い時期から襲来し、その回数も多かったため、佐賀、大分県の浸冠水した圃場で白葉枯病の発生が多く、大分県では1993年、1996年に次ぐ多発生になった。紋枯病は宮崎県で多発生したが他の県では平年並みであった。前年度長崎県で多発生して問題になった縞葉枯病はやや少の発生で終った。3月採集のヒメトビウンカの保毒虫率は7.7% (前年1.2%)、5月のそれは1.5% (前年0.6%) であったので、やや少発生になった原因は不明である。その他の病害では佐賀県で黄化萎縮病がやや多、大分県で稻こじ病がやや多発生した以外は特に問題となる病害の発生はなかった。

小麦の病害はいずれも平年並みの発生であったが、大麦では近年発生が多く問題になっている斑葉病が本年も福岡、佐賀および長崎県で多発生し、熊本県でもやや多発生になった。種子消毒の不徹底が原因である。また、福岡県では網斑病が多発生した。

2. 野菜・畑作物

イチゴでは例年発生が多く問題になっているうどんこ病が本年も佐賀 (3月26日注意報)、長崎、大分および宮崎県でやや多発生、鹿児島県で多発生した。前年の発生が多く感染苗が本圃に移植されること、品種の抵抗性が弱いことが原因と考えられる。炭そ病が福岡、長崎、熊本および宮崎県でやや多発生、鹿児島県で多発生した。また、佐賀県では炭そ病、疫病による苗立枯症が多発生した。

キュウリでは福岡、熊本県の冬春作にべと病がやや多

発生した。初期防除の不徹底が原因になったと考えられる。うどんこ病が佐賀、熊本県で、褐斑病が大分、宮崎県でやや多発生した。

トマトでは佐賀、熊本および大分県の冬春作に灰色かび病がやや多〜多発生した。ハウス内の高温、多湿に加え薬剤耐性菌の発生による防除効果の低下が原因になったと考えられる。大分、宮崎県の冬春作でやや多〜多発生した。生育期間が高温で推移し、抵抗性台木の使用や土壌消毒が行われていない圃場で多く発生した。

ナスでは福岡、佐賀および熊本県の冬春作ですずかび病がやや多〜多発生した。

沖縄県では冬春作のキュウリ、トマト、ナスや露地のスイカ、ニガウリ、オクラ等にうどんこ病が多発生した。

ジャガイモでは長崎県の春作に疫病がやや多発生した。2月下旬から3月の高温と適度の降雨によって生育が旺盛、過繁茂になり、早くから発病好適条件になったこと、収穫期の遅れと5月上中旬の曇雨天が原因になった。秋作では青枯病がやや多発生した。

ダイズでは相次いで襲来した台風による強風雨で葉焼け病の発生が佐賀、長崎および熊本県で多かった。

本年、新たに以下の病気の発生が確認された。*Colletotrichum acutatum* によるイチゴ炭そ病 (福岡県)、ユウガオ (ユウガオ台スイカ) 黒点根腐れ病 (大分県)、レタスうどんこ病 (沖縄県)。

3. 果樹

カンキツではかいよう病が佐賀県で多発生、長崎、大分および沖縄県でやや多発生したが、その他の県ではやや少〜並み発生であった。多発生の原因は発芽期から開花期までの多雨と6月中旬〜9月中旬にかけての台風により発生が助長されたことによるもので、長崎県では8月5日に注意報を発表した。黒点病が福岡、大分県でやや多発生した。7月上旬、8月上旬の連続的な降雨と防除不徹底が原因になった。また、日焼け果 (炭そ病) が宮崎県で多発生し、これには台風13号通過後の急激な高温乾燥が原因になり、佐賀県でもやや多発生した。

ナシでは佐賀県で輪紋病が露地の豊水で多発生した。8月上中旬に雨が多く、果肉が先熟したため果実の感受性が高まったことが原因になった。長崎県では黒星病、赤星病、うどんこ病がやや多発生し、黒星病は大分 (注意報5月2日)、鹿児島県でもやや多発生になった。佐賀県の施設栽培ナシで花腐れ細菌病の発生が新たに確認された。

ブドウでは枝膨病が福岡、佐賀県でやや多発生した。降雨による防除不徹底が多発生の原因になった。べと病は佐賀、長崎および大分県でやや多発生し、これには6月下〜7月中旬の降雨が関与していた。褐斑病は佐賀、

鹿児島県でやや多発生した。

カキでは炭そ病が佐賀県で多、福岡県でやや多発生した。6月下旬～7月中旬の降雨日が続いた時に防除が十分行われなかったことが原因になった。

その他の果樹では沖縄県でマンゴーかいよう病がやや多発生であった以外は特に問題となった病害はなかった。

4. 茶樹・花き・特用作物

茶樹では鹿児島県で輪斑病が二～三番茶期にかけて多発生し、新梢枯死症も各地で発生した。二番茶摘採期が高温多湿になり、感染発病に好適となったためと考えられた。また、炭そ病が佐賀、長崎および鹿児島県でやや多発生し、もち病は宮崎県で多発生(注意報8月25日)、鹿児島県でやや多発生した。

花きでは宮崎県でキクえそ病(TSWV)の発生が新たに確認された。

サトウキビでは発生の多かった病気はなく、平常並み～少発生であった。

(九州農業試験場地域基盤研究部)

〔害虫発生概況〕

1. 稲・麦

水稲：海外飛来性のウンカ類は7月2～3半旬に主要な飛来がみられた。セジロウンカ、トビイロウンカとも飛来量は概して南九州では少なめ、北部九州では並みからやや少なめであった。飛来時期が例年よりやや遅かったこともあり発生も並みからやや少なめであった。しかし、長崎県ではトビイロウンカの飛来量が例年よりやや多く、8月下旬から第2世代幼虫が顕在化し、作期後半に各地で坪枯れが生じ問題になった。コブノメイガも主要な飛来が7月2～3半旬にみられた。飛来量、その後の発生とも、並みからやや少なめであった。海外飛来性のウンカ・コブノメイガに長期残効性農薬の箱施用が普及したことにより、後期防除のあり方が問題になっている。

鹿児島県では箱施薬の変化に伴いツマグロコバヤが増加傾向にある。大分県では一部地域でニカメイチュウが多発し、佐賀県ではフタオビコヤガなどの発生も話題になった。

斑点米カメムシ類が福岡県の普通期稲や宮崎、鹿児島両県の早期・普通期水稲で問題になった。鹿児島県では6月に注意報が発表された。宮崎県では斑点米が品質格下げの主要因になっており対策が急がれている。カメムシ類の発生予察が難しいことが問題点にあげられている。厳しい米の等級格付制度にも問題があり、改善が望まれる。

スクミリンゴガイの発生量は並みから多く、7月中旬の降雨で冠水した水田が被害を受けた。

麦類：特段問題となる害虫の発生はみられなかった。

2. 畑作物

ダイズ：ハスモンヨトウおよび吸実性カメムシの発生は平常並みかやや少なめであり大きな問題にはならなかった。

サツマイモ：ナカジロシタバが鹿児島県で多発生した。ハスモンヨトウ、イモキバなどその他の害虫は概して平常並みの発生であった。

ジャガイモ：長崎県では春作、秋作とも、アブラムシ類、ニジュウヤホシテントウ、ジャガイモガイなどの主要害虫の発生は並みか並み以下の発生であった。

3. 野菜

共通：ミカンキイロアザミウマは、沖縄県を除く九州各県において分布地域の拡大が見られている。また、寄主作物の種類も増加しており、イチゴ、ピーマン、トマト、キュウリ、キク等では本種による被害が問題となりつつある。さらに、ミナミキイロアザミウマやヒラズハナアザミウマの寄主作物では、ミカンキイロアザミウマを含めた混発も観察された。

マメハモグリバエは沖縄県でサヤインゲン、トウガン、ニガウリ等で発生が多い傾向が見られた。九州本土においてもトマト、ナス、シュンギク、セルリー、キク、ガーベラ等を中心として多種の作物で発生が多い傾向にあるが、大きな被害は生じていない。

タバコガ類の発生が秋期に福岡県でナス、キャベツ、レタス、トマト、キク、鹿児島県でエンドウ、ダイコン、沖縄県でキク、レタス、ピーマン、長崎県でイチゴ等で見られた。これらの多くはオオタバコガによるものと思われるが、今後、種の特定が必要である。また、ハスモンヨトウやシロイチモジヨトウも秋期に各種の野菜・花き類で多い傾向が見られた。

ナス科野菜：アザミウマ類、アブラムシ類、ハダニ類、コナジラミ類等害虫の発生は平常並みかやや少ない傾向にあった。コナジラミ類については、オンシツコナジラミとシルバーリーフコナジラミの混発が見られる傾向にある。

ウリ科野菜：ミナミキイロアザミウマ、アブラムシ類、ハダニ類等の害虫の発生は、平常並みかやや少ない傾向にあったが、沖縄県のスイカ、メロンではハダニ類が多発傾向にあった。

アブラナ科野菜：コナガ、アブラムシ類も含めて害虫の発生は平常並みかやや少ない傾向にあった。

イチゴ：ハダニ類は栽培後期(大分県)から育苗期(長崎県)で多い傾向にあった。アブラムシ類は平常並みの発生であった。

4. 果樹

共通：果樹カメムシ類は1996年に異常飛来し、各地に甚大な被害をもたらした。本年は越冬量が平年に比べて少なかったこと、主要な増殖源であるスギ、ヒノキの穂果量が平年より少なかったため、発生(飛来)量は少なかった。

カンキツ：ミカンハダニが沖縄県でやや多発した。九州地区では梅雨期～8月の間、多雨・台風の通過により少発生であった。秋には好天が続き、一部の地域で増加傾向が認められ、長崎県では9月に注意報が発表された。ミカンサビダニは福岡、佐賀両県でやや多発した。チャノキイロアザミウマが長崎、熊本、宮崎、沖縄の4県でやや多発し、沖縄県では5月に注意報が発表された。アブラムシ類が春期の高温により、長崎、宮崎両県でやや多発した。また、沖縄県ではレモントビハムシが局部的に多発した。その他の害虫の発生は並みから少であった。

ナシ：ナシヒメシンクイが熊本県でやや多、ハダニ類が鹿児島県でやや多、アブラムシ類が長崎県でやや多の発生であった。その他主要害虫は平年より少から並みの発生であった。

モモ：熊本県でモモハモグリガがやや多発した他は平年並みの発生であった。

ブドウ：主要害虫の発生は平年並みであった。

カキ：フジコナカイガラムシが佐賀県で多発、福岡県でやや多発した。

熱帯果樹：沖縄県のマンゴーとバナナにおける害虫の発生は平年並みからやや少であった。

5. 茶樹

クワシロカイガラムシの発生が福岡、宮崎、鹿児島県などで多く、鹿児島県では5月と9月に注意報が発表された。本種の発生は年々拡大傾向の確かな発生予察法の開発が望まれている。二番茶期および秋芽生育期にチャノホソガの発生が全般的にやや多かった。その他の害虫は概ね並みから並み以下であった。

6. 特用作物

サトウキビ：沖縄県宮古群島、久米島などでメイチュウ類が多発し、2月に注意報が発表された。宮古群島の新植夏植にサトウキビノチビアザミウマが多発し、2月に注意報が発表された。その他の主要害虫は平年並みかそれ以下の発生であった。鹿児島県でクロマルコガネが発生し、特殊報が発表された。

(九州農業試験場地域基盤研究部)

(野菜・茶業試験場久留米支場)

(果樹試験場カンキツ部口之津)

1997年水稻主要病害虫の発生面積

(単位：ha)

病害虫名	福岡	佐賀	長崎	熊本	大分	宮崎	鹿児島	沖縄
(病害)								
葉いもち	33,878	17,495	5,000	15,000	19,800	19,679	20,274	160
穂いもち	26,304	6,645	2,000	11,000	12,000	19,572	14,198	32
紋枯病	40,692	27,055	8,800	18,000	19,650	23,016	19,182	120
白葉枯病	2,790	2,830	50	400	3,055	—	528	0
もみ枯細菌病	18,557	2,372	200	4,080	2,000	492	1,037	—
縮葉枯病	3,420	400	800	0	2,500	—	168	—
萎縮病	571	0	10	0	800	—	637	—
黄萎病	—	0	5	—	—	—	172	—
ごま葉枯病	560	3,830	3,070	100	4,500	4,190	303	310
ばか苗病	572	200	1,400	100	1,200	—	1,001	2
心枯線虫病	85	65	—	20	3,000	—	384	2
内稈褐変病	—	—	—	—	—	3,804	17,156	—
稲こうじ病	15,028	1,581	—	—	9,500	—	2,487	—
(虫害)								
セジロウンカ	33,535	27,860	17,200	9,000	12,900	22,148	9,638	176
トビロウンカ	23,512	20,145	17,200	7,000	10,100	6,753	3,090	155
ヒメトビウンカ	30,803	5,215	8,000	4,000	1,000	13,542	6,313	1
ツマグロヨコバイ	23,436	15,315	8,000	9,500	6,100	19,596	21,713	500
コブノメイガ	32,683	30,811	13,700	20,500	25,000	8,907	25,135	217
イネツトムシ	6,663	2,115	1,000	—	4,000	237	2,274	0
イネヨトウ	688	850	1,200	100	700	1,231	2	0
フタオビコヤガ	564	3,860	250	—	2,000	—	460	3
アワヨトウ	3	1,355	110	90	450	3,202	132	0
ニカメイチュウ第1世代	350	0	0	0	400	0	0	0
ニカメイチュウ第2世代	541	0	0	0	350	0	0	0
イネミズゾウムシ	4,424	5,100	6,000	5,000	9,500	14,749	9,354	705
イネゾウムシ	5,078	1,115	3,000	100	4,500	—	7,267	1
斑点米カメムシ類	8,327	5,225	8,500	2,000	4,500	9,672	12,001	136
イネクロカメムシ	1,598	215	700	50	500	—	1,057	6
スクミリンゴガイ	19,450	10,766	2,570	4,500	3,500	4,612	6,606	86
総作付面積 (236,739)	46,481	34,400	17,200	49,800	30,500	25,800	31,390	1,168

注) 発生面積は早期・普通期または一・二期作の合計値で示した。